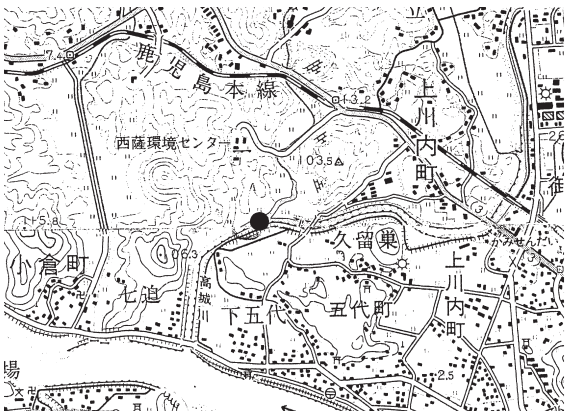
205

外川江（そとかわえ）遺跡

（川内市五代町西外川江）

位置と環境

遺跡は市街地から北東に約４㎞のところにあり，紫尾山系西端の支脈が南側の川内川へ緩やかに下った小丘の最端部の標高約３ｍの水田に位置している。川内川の支流，高城川の河川改修に伴って河道を変更するために水田中を新たに掘削している最中に発見された。約１㎞上流には，古墳時代の在地性の強い墓制である地下式板石積石室墓の群集墳である横岡古墳がある。



第１図　外川江遺跡の位置

調査の経緯

昭和50年（1975年）に，地元住民から高城川改修工事中に土器片が多数出土している旨の通報があった。当時は，水田掘削部の両岸の断面に幅約100ｍにわたって夥しい土器片が露出しており，地表下約１ｍには，良好な状態で遺物包含層が確認されたが，河川幅約60ｍは工事が施行された。

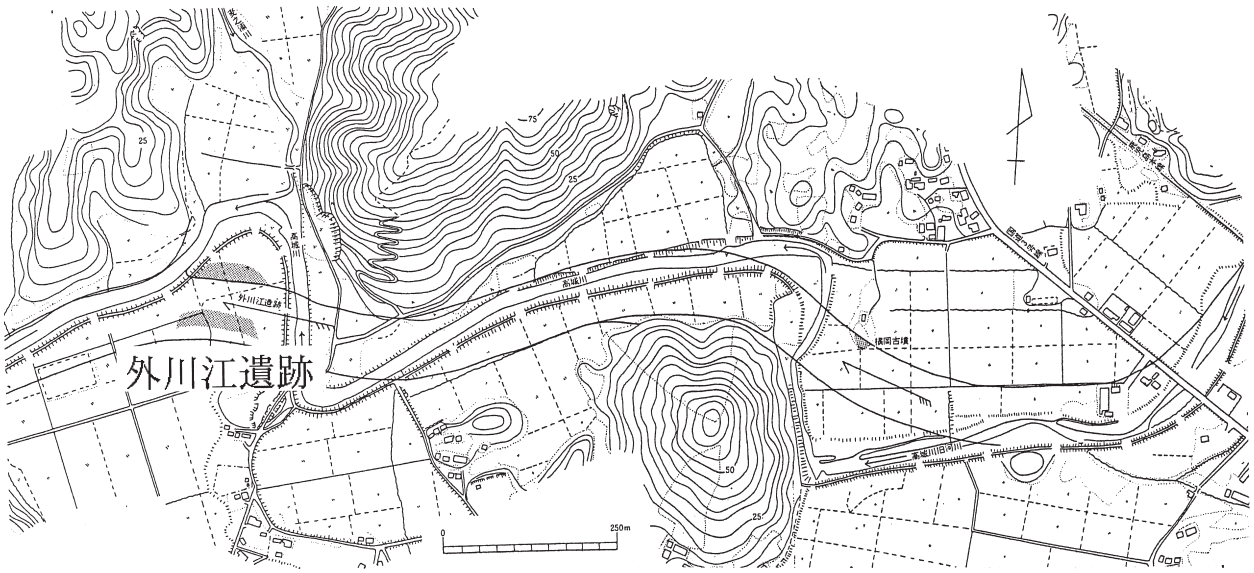
県教育委員会は同年12月に確認調査を行ない，左岸を昭和53年10月～同54年１月に，右岸を昭和58年７月～９月にそれぞれ本調査を行なった。

遺構と遺物

遺構は，細長い掘り方を持つ帯状遺構と呼称したものが二条検出され，埋土から内黒土師器が出土したことから，平安時代頃の遺構と考えられる。遺物は，主体を占める弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけての夥しい量の土器のほか，縄文時代後期・晩期，弥生時代前期・中期などの各時代の土器，土師器，須恵器，小形仿製鏡をはじめガラス小玉，土製勾玉，石庖丁，磨石，敲石なども出土している。

縄文時代後・晩期の遺物は，松山式，北久根山式，西平式，それに晩期II・III式の土器が出土し，瀬戸内系の津雲Ａ式類似の土器も見られた。

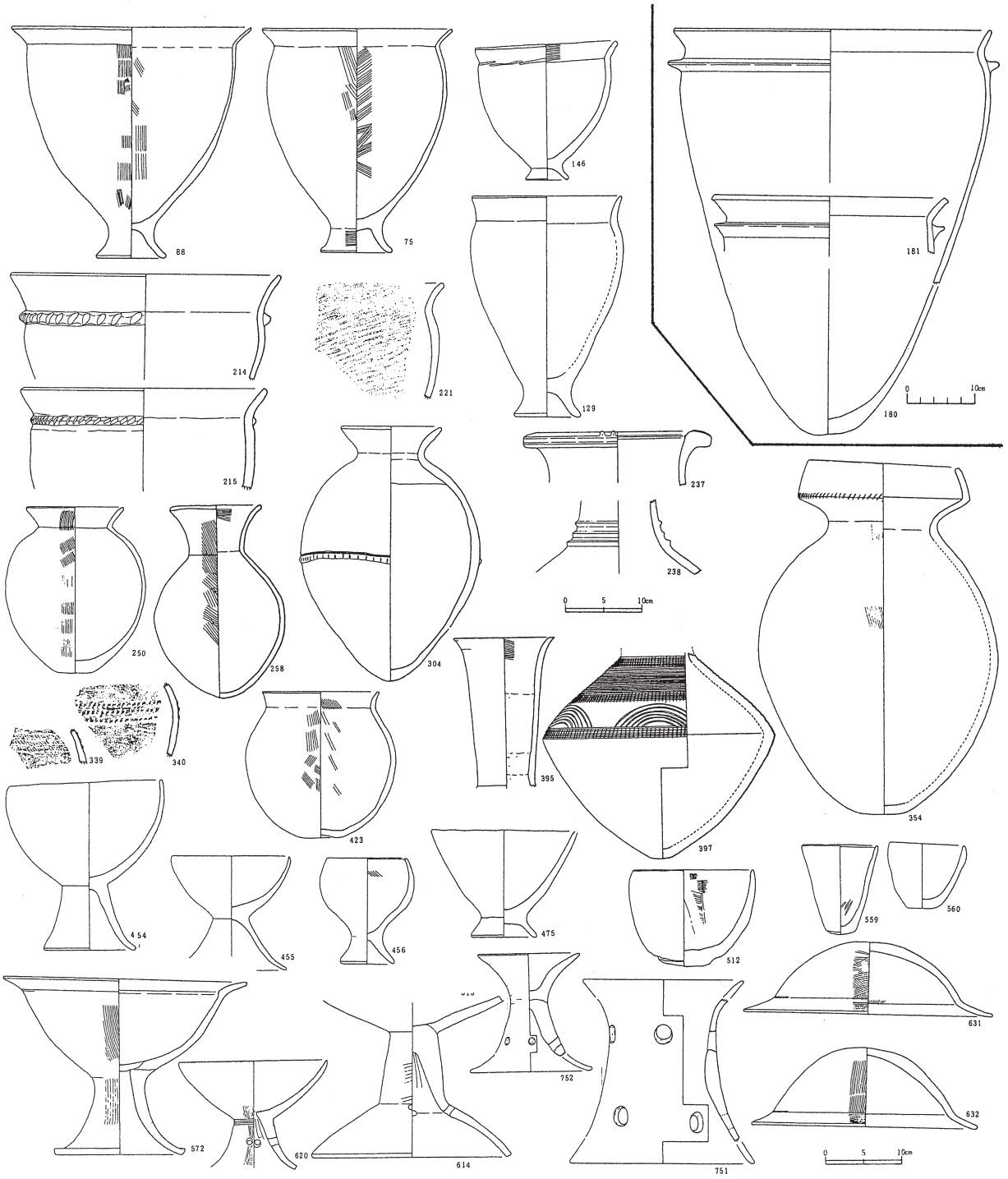
弥生時代後期から古墳時代には，甕形土器の口縁部が外反して頸部がやや締まり，底部には上げ底の脚台が付く。脚台の高さは，低いものから極めて高いものまであり，本体底部の形状も平底から丸底，尖底気味のものまでバリエーションが豊かである。



第２図　周辺地形図

施文は刷毛目を主とするが，叩きによるものも見られる。また，頸部に刻み目突帯の巡るものもある。長胴や，口縁部が２つに分かれたように見える二叉口縁の大型のものもある。壺形土器も，頸部が締まって口縁部が外反し，中膨らみあるいは長胴で丸底からやや不安定な平底である。ほかに，短頸壺，袋状口縁，免田式系の長頸壺形土器も出土した。

鉢形土器は，体部が半円状となるもの，口縁部が内彎するもの，逆に直線状に大きく開くものなど種類が豊富である。底部は高い脚台が付くものを中心に，円盤を貼り付けたようなものや完全な平底もある。高坏形土器の体部は深さに対して径が大きく，口縁部を更に外に開くもの，直線状に外に広がるものなどが見られ，脚部の形状もさまざまで，穿孔の



第３図　土器

あるものもある。器台形土器は高坏形土器に類似するもののほか，鼓形のものもある。本県では出土例の少ない蓋形土器も見られる。

杓子形土器も割合に多く出土している。体部が深く，U字形をなすもの，柄から直線的に低く体部に至り，広さはあるが深さの浅いものの大きく２種類に分かれ，柄も斜め方向に低く伸びるものと，上方に高く伸びるものとが見られる。また，飯蛸壺と考えられるものや，土製勾玉，土製加工品（通称メンコ）のほか，管状土錘や双孔棒状土錘も出土した。

石器は半月形および長方形の石庖丁や，磨製石鏃，擦り切り石器，石錘などが出土した。そのほか，特筆すべきものに，小形仿製鏡（内行花文Ｓ字状文鏡）と，厚さ1.5cm，幅15.5cm，長さ70cm程で，一方を鈍く尖らせた板状の木器も出土している。

特徴

当地の古墳時代を中心とした一括遺物のまとまりとして，極めて貴重である。

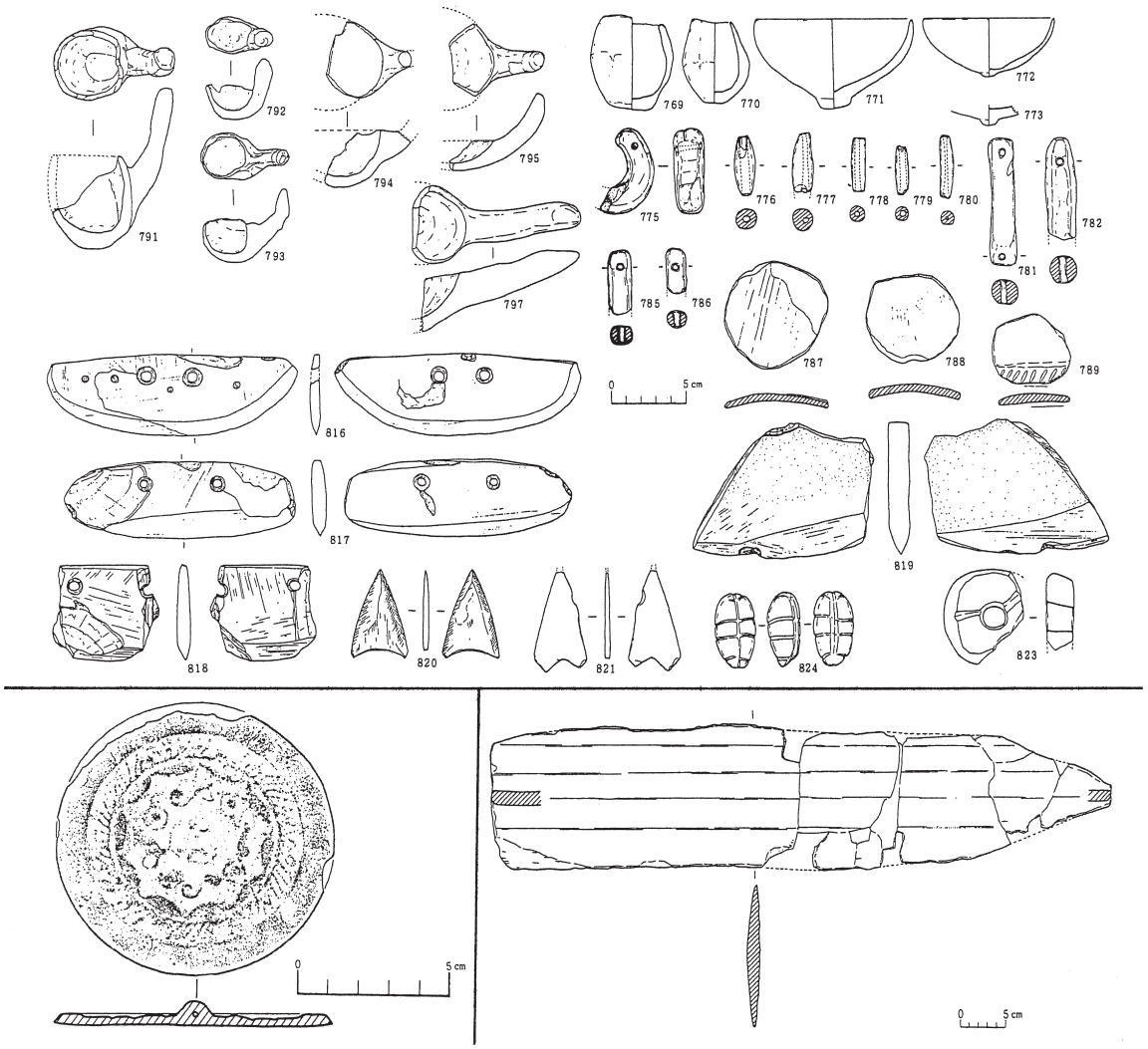
資料の所在

出土遺物は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1984「外川江遺跡・横岡古墳」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(30)

（繁昌正幸）



第４図　土器・土製品・石器・銅鏡・木器